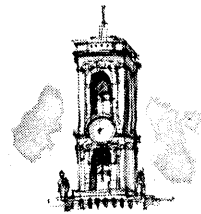


# 中教審答申を読んで



児 玉 省

改革の構想の中核は四―七歳児のために幼児学校を創設して一貫教育を行ない、早熟化の傾向のある子どもに、早期教育による才能開発の可能性を検討するというのであるが、これに関連して、就学の時期の再検討という言葉が使われている。本答申には注釈がついていないが、この始期というのは、何を意味するのであるか。幼児教育をはかるために、五歳からまず義務教育をするという考え方をさすものであるか。またはやがては四歳から才能開発の開始を考えることに連なるものであるか。またはそういうことにこだわらないで、先導的実験の結果をまっけて考えるというのであるか。いずれにしても内容のあいまいな表現である。

たとえば、幼児学校の教育内容と方法はどういうことを期待しているのだろうか。筆者の批判―もしありとすれば―はそ

の制度自体と、同時にその内容と方法にかかってくるであろう。こういう点については報告が細かい指摘をしていないが、前述した幼年期の早熟化に対応して早期教育による才能開発の可能性を考えるという指摘が、この報告の方向づけをするものと考えざるほかない。ただこれとても、方法については当然ふれるところがない。

新教育制度の期待する人間像については、(1) 個性と社会性の豊かな、特定の能力の伸張だけでなく多面的に発達した人柄、(2) かつ科学技術と、経済の高度成長に伴って起こっている、人間生活の不調和に対応する新知識と技術を身につけた英知の所有者。(3) 現在の生活環境に対応し得るたくましい体力と生活力を養う、ということになるであろう。

人間像の問題は別にして、四―七歳制の考えの源流はなにか

について、はっきりした見本があったとはいえないであろうが、一つには英国の幼児学校制度、もう一つはジャン・ピアジェの児童発達理論などが構想の出発点になったのではないかと思う。もしそうでなかったとしても、この二つの点は中教審答申と関連して考えていいであろう。

こうした理由から筆者がここで述べようとすることは、中教審答申が示した改革の構想の外側の構築——しかもそれは幾重にも解釈し得るような——点（点と線の点の意味）の筆者の想像におけるつなぎ合せの上に話をすすめることになるであろう。

I まず第一に現在の幼児は、早熟している？ これにはいろいろな意味があるが、ここでは身体的、知的、性格的に早熟化しているであろうか？ 身長と体重を物差しにすれば、今の子どもは戦前の子ども、戦後初期の子どもに比べて、かなり発達が早いことは周知のとおりである。いわゆる発達加速化現象が内外を通じてあらわれている。知的発達にも早熟化の現象がみられるであろうか？ この点についての考察は、比較の時期を百年単位にするとか、原始民族と現在の日本人におくとか、こういう物差しを使えば、おそらく現代の幼児は早熟化していると考えるべきだろう。しかし現実の教育政策の問題として考える場合には、物差しはここ二十年、三十年、たとえば戦後の教育改革当時との比較になるのが当然である。第二には、幼児

のいかなる面をとり上げて比較しようとしているか？の問題がある。たとえば、もっぱら算数や言語能力に焦点を合わせるか、または性格的な面をも合わせて考えるか？ 第三には、早熟化を肯定し得るいかなる資料の持ち合わせがあるか？

紙数の関係で端的に話を進めると、日本保育学会は一九五四年に、全国的規模で七千名の三歳～六歳児を運動能力、知的発達、感情的発達、社会性発達の面で調査し、さらにその後十五年後一九六九年に、同様七三二〇名の幼児を同一物差しを用いて調査したところ、運動能力の点では、十五年後の方がだいぶ発達がおくれ、知的発達ではほとんど差がなく、社会性の発達でも十五年後の方がかなり発達がおくられていることを見いだした。これでは早熟どころではない。ただ、国立国語研究所が、中教審の中間報告とほとんど同時に発表した調査では、二十年前に比べて、現在の子どもの読字・書字能力などがかなり伸びていることを明かにした。ただ国研の研究は、近畿と関東と東北に限られて、人数も二千名程度のものである。漢字の読字、書字能力も能力にはちがいないが、その後、これらの子どもたちが小学、中学と進むにつれて、現在の子どもの漢字の読字、書字能力が戦前の子どもたちのそれに比べて、進んでいるといえるであろうか？ もし、一步をゆずって進んでいると仮定したとしても、漢字の読・書字能力が知能構造において占める比重

はどんなものであろうか？ また算数について、筆者らが行った WISC による調査結果では、今の五歳児が算数能力で、二十年前に比べて、進んでいるという証拠はない。

II 第二の問題は、中教審答申は、かたよらない発達をした。個性的な社会性のある人柄の育成を求めている、まことに結構なことであるが、これが「早熟化に応じた知的能力の開発」の可能性をうたいながら、社会性がおくれたり、運動能力がおくれている点に言及していない。四歳ごろから算数や字を教えていることの可能性だけをうたって、ほかの面のことを問題視していないことは、答申案が、頭でっかちの教育に陥る可能性を心配させるに十分である。現在の子どもが健康的に不十分で、精神的たくましさが欠けていることを憂えているかに見える中教審は、このたくましさを育てるための手段を考えないで、むしろこれを無視しているという印象である。四歳児に字や数を教えたからといって、すぐそれが性格や体力、教育無視ということではないことは十二分に承知しているが、結果的にそのような可能性の多いことは認めなければならない。ことに中教審答申を喜んでいる、いわゆる教育ママの多いことはこれを暗示している。

III 第三には、幼児期から「早期教育」をすることが、児童の知的発達にとって最も望ましい方法であらうか？ 早く教え

たら、それだけ子どもの一生涯を通じて、能力が伸びることを保証できるであらうか？ まず四歳児が字や数の教育を吸収する能力があるか？という問題があるが、これについてはピアジェ、モンテッソーリなどの研究からみて、教える力のよろしきを得れば、子どもは吸収するであらうと思う。

また筆者は、知的発達は、同時に感情的社会性発達をも促進し得る可能性のあることも肯定するにやぶさかでない。ピアジェも知的発達が感情的発達をともなっていることを指摘している。ただ問題は、知的な面だけが主として促進せられて、ほかの面が軽視せられる可能性、そのために発達がかたよる可能性のあることも事実である。現在の子どもの発達の姿は後者のケースであるというのが筆者の印象である。

引きつづいて、早く教えたらどういうことになるかということについては、たくさんのおもしろい結果が報告されている。早く教えずすぎたもので、あとになって新鮮な学習意欲がなくて、結局マイナスになったというのあれば、あとになって小中学校での学習が楽であったという人もある。しかし筆者はここでは、もっと組織的な研究の例を二つあげたい。一つは、英国の National Child Development Study の報告で、これは一万人以上の児童を、誕生からすでに十年以上にわたってその発達を追跡しているものであるが、これによると、幼児学校を満五歳

以前にスタートしたものと、以後にスタートした者について、早くスタートした子どもの方が読字能力、数える能力についても、また、環境への適応についても成績がよかった。ただしその半数は、七歳の幼児学校終了時においても、まだ幼児的教育方法を続けることが望ましいことがわかった。幼児学校というのは、歴史的には勉強に重きを置いてスタートしたのであるが、それではうまくゆかず、現在は幼稚園の方法に頼っているのがあって、その幼児的教育方法でさえも七歳時においてまだそれをつづける必要のある子どもが、五割あるということは、何を意味するであろうか？

も一つの研究は、今年ベルギーの国際応用心理学会で発表された研究で、一九六六—一九六九にわたって施された International Association for Evaluation of Educational Achievement (IEA) が行なった理科、言語理解力、文学、外国語(英語、フランス語)、公民の六教科にわたって国際的に調査を行なった発表であるが、十歳児では、教育が五歳で始められた者、六歳、七歳で始められた者のいかに問わず、言語理解力は、差がなかったと報告されている。(他教科は未発表)。

最後に、国際応用心理学会の発表の一つ、最近のアメリカの Carnegie Report on Education では教育の human 化を指摘している。幼稚園で、自由にのんびりと遊ばさないで、教科書

まで使って、字や数を教えている日本の多くの幼稚園は、正にこの典型である。これらの幼稚園で早期教育された子どもたちが、その後中学、高校、大学と進学した場合、そういう早期教育を受けなかった者に比べる十分な資料がないが、とくにすぐれていたということを信じさせるものはない。また東京で、幼稚園時に早く字をおぼえたり、数を教わっていた子どもと、そういうことを一こうに知らなかったが、社会性の発達がすぐれていた同一幼稚園の子どもと比較した追跡研究があるが、この研究では、幼稚園時代に社会性のすぐれていた子どもの方が、その後中学の成績が上まわっていたことを示している。

早期教育の内容、方法を示していない答申について、この点を批判することは意味がない。しかし早期教育というと、前述のような形や内容になりやすいと考えるのが常識的であろう。

IV 具体的内容のない答申は今後どうにもなり得る可能性がある。我々の眼からみて、きわめて危険でもあるし、また骨ぬきにもなる。ただ幼児教育に関する答申部分についていえば、なぜこういう考え方にしなければならぬか？という事と、この答申の実現の結果と、現在の児童の発達状態についての充分な思考、ならびに、充分な資料なしに、こういう考え方に突入したのではないかという印象をぬぐい得ない。我々は今後、この答申の行方を十分に監視しなければならない。